＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

平野　嘉孝（ひらの よしたか）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

【書名】吾輩は猫である
【著者】夏目漱石
【発行】学習研究社（カラーグラフィック『明治の古典』第９巻に収録）

漱石の各小説・随想（例えば、『夢十夜』、『硝子戸の中』など）を読むなら、各出版社から出ている文庫版をお薦めします。寝転がって読むには、文庫本は軽くて都合がよいからです。本書は「猫」の本文に加えて、漱石自筆の絵はがき（カラー）や友人・知人に書き送った手紙・はがきなどがページの随所に掲載されていて、見ても楽しい『吾輩は猫である』。中でも芥川龍之介と久米正雄に送った手紙の一部や、妻ではない意中の女性の死に際して詠んだといわれる俳句が印象的です。しかし残念ながら、本書自体は現在入手困難かもしれません。公共図書館か古本屋で探してみて下さい。

【書名】森林がサルを生んだ――原罪の自然誌
【著者】河合雅雄
【発行】小学館（『河合雅雄著作集』第３巻に収録）

最初、平凡社から単行本が出版され、次いで講談社文庫（学部生の頃、私が読んだのはこの版）に収録され、その後、朝日文庫に出版元が代わり、現在は小学館の『河合雅雄著作集』第３巻として入手可能なようです。かつてのサル学の泰斗による代表作。森林を生活圏にしているサル類は、外敵（天敵）がいない動物であるため、周期的に疫病が発生することで、個体数が調整されているそうです。このような視点に立つなら、医療技術の発展もまた環境負荷を形成していると言えるのかもしれません。サル社会の丹念な観察から、人間社会再考のための視点を提供してくれる好著です。

【書名】世界の十大小説　上・下
【著者】ウィリアム・サマセット・モーム（西川正身 訳）
【発行】岩波書店（岩波文庫）

人は他人のことを語るとき、ありのままに語るのではなく、自分自身の特質という色眼鏡を通して語るしかないのだ。これが、各小説を分析するモームの基本的視点である。本書は、モームが選んだ10篇の小説のあらすじについて語られたものではなく、10人の小説家に関して、伝記などの膨大な資料を簡潔に駆使し、説得的でバランスのとれた人間分析を施した上で、各小説家の分身としてそれぞれの小説を分解してみせる、まことに興味深い人間観察の書である。対象となっているのは、スタンダールの『赤と黒』、バルザックの『ゴリオ爺さん』、フローベールの『ボヴァリー夫人』、メルヴィルの『モウビー・ディック』（邦訳名『白鯨』）、ドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』など。退屈でつきあいきれないほど長大な世界の名作は、やはり欠陥の多い冗長な作品であった。だが、それにもかかわらず、それらの作品にはすべてそれぞれに、比類なき偉大な長所がある。モームは彼独自の視点から、それらの長所をも明確に示してくれる。この作品に関するかぎり、モームには漱石の明快さに通じるものがあるのかもしれない。

【書名】	道楽と職業	働くということ	告発封印
【著者】	夏目漱石	日本経済新聞社（編）	高任和夫
【発行】	ランダムハウス 講談社（文庫『漱石傑作講演集』に収録）	日本経済新聞出版社 （日経ビジネス人文庫）	光文社 （光文社文庫）

『道楽と職業』は、講演の名手でもあった漱石による兵庫県明石での講演記録である。その講演内容を要約すれば、分業社会では他人のために働くことが結局自分のためになる。しかし、自分本位が重きをなす仕事もある。それは…。生きていくために働くという段階が終わりつつある社会では、働く意味があらためて問いなおされる。大学は出たけれど、職業に就きたいとは思わないという風潮は、今にはじまったものではない。

『働くということ』は、日経新聞連載時から好評であったらしいドキュメント記事。トップ技術者から転身し、子どもに未来を託す園長先生、あるいは何度も退職を決意しながら、満足しつつ定年を迎える企業人など、様々な就職スタイルをとりながら現代を生きる人間模様が、手短に次々と展開される。

さらなる併読本としては、現代の大手商社審査部で問題取引を20年以上に

わたり監視・対処してきた著者による企業サスペンス。『告発封印』は連作小説で、各事件が簡潔に解決される。儲けるためには手段を選ばない問題取引などの、より詳細な構造を知りたければ、同じ著者の『架空取引』、『商社審査部25時――知られざる戦士たち』、『粉飾決算』（いずれも講談社文庫）などがお薦め。最新連作小説集『罪びと』（光文社）は『告発封印』の続編的内容。

人間のための経済活動から、効率的な経済のために必要な人間の養成へ、という様相を呈しつつある現代。「人間らしい生活」を取り戻すことは、果たして可能か。

【書名】下山事件	日本の黒い霧　上・下	プラトンの『国家』
【著者】森達也	松本清張	サイモン・ブラックバーン （木田元 訳）
【発行】新潮社 （新潮文庫）	文藝春秋 （文春文庫）	ポプラ社 （『名著誕生』第４巻）

日本がまだ何処に向かうか定かではなかった戦後まもなくの1949年、怪事件が頻発する。その中で最大級の謎に包まれているのが、国鉄初代総裁轢断死事件。通称下山事件。自殺説、GHQ謀略説、共産党犯行説など、その真相解明に挑戦した作品は多い（『日本の黒い霧』第１章参照）。アメリカ占領軍内のGSとG2の勢力争いと、その結果としての占領政策の方向転換。政策転換に利用される、三越本店傍の貿易商を装った諜報機関。その諜報機関を指揮していたのは、「国のため」を大義名分とし、他人の命を平気で踏みにじる、右翼の大物然とした地方の名士。日本政府の「公式」見解は、自殺。しかし同時に、当時勢力を拡大しつつあった共産党の弱体化を図り、民衆内に同党への漠然とした恐怖感を醸成するよう絵を描いたのは誰か。アメリカの政策に盲従し、根拠なきデマを公式発表する首相。大勢に流される書き捨て・読み捨ての新聞記事。関係者が次々と鬼籍に入るにしたがい、闇の圧力は融けはじめるが、そのとき、有力な証言・物証もまた消えていく。映像作家でもある『下山事件』の著者は、時に繊細すぎるほどの接近法で、事実の断片を拾い集め、真相を象ろうとする。が、それは真相を解明するためではなく、主観的な真実を感知するためにそうするのだ。近すぎる事件は焦点が合いにくい、ゆえに遠い過去をよくよく考えてみることが必要なのだ、とつぶやきながら。「力」を持たないものが、同じ事態の繰り返しを可能なかぎり避けるためには、このような試みを重ねることが必要なのかもしれない。「プラトン国家論」の強者の正義に関する議論などと重ねながら読むと、国家の論理の

一般性と日本という国の特殊性などについて、考えや興味も一層深まる…かもしれない。

【書名】赤西蠣太　　樅ノ木は残った　上・中・下
【著者】志賀直哉　　山本周五郎
【発行】岩波書店　　新潮社
（岩波文庫『小僧の神様』に収録）　（新潮文庫）

山本周五郎の小説世界を簡潔に表現すれば、慎ましやかではあるが、凛としていて、澄み渡っている、ということになるでしょうか。いわゆる「伊達騒動」を題材にとったこの２つの小説は、前者が短編で、後者が文庫本３冊からなる長編という形式の違いだけでなく、焦点のあて方も全く異なります。腸捻転を自分で割腹して治すという破天荒な架空の人物を中心に、とりとめのない、だが同時に、当人にとって思いがけない事態へと話が展開していく『赤西蠣太』に対して、村のお寺の屋根裏から発見された新資料を元に、伊達騒動の（ひいては原田甲斐の）真実をあぶり出そうとする山周。変幻自在な小説家の空想力と構想力をとくとご賞味下さい。

山周の他の短編なら、『町奉行日記』、『私です物語』（以上、短編集『町奉行日記』所収）、『百足ちがい』（短編集『深川安楽亭』所収）、『裏の木戸はあいている』（短編集『ひとごろし』所収、いずれも新潮文庫）などが読みやすいかもしれません。『さぶ』（新潮文庫）は力作長編ですが、最新文庫本は映画化にあわせたような、藤原竜也らしき男の劇画風表紙で、購入するには躊躇するかもしれません。

【書名】素数の音楽　　オイラー、リーマン、ラマヌジャン　整数
——時空を超えた数学者の接点
【著者】デュ・ソートイ　黒川信重　　田島一郎
（冨永星 訳）
【発行】新潮社　　岩波書店　　共立出版
（新潮クレストブックス）　（岩波科学ライブラリー）　（数学ワンポイント双書）

皆さんは素数について、どれだけのことを考え続けられますか？ 上記３冊は、素数について考え続けてきた人間の歴史を一般向けに紹介したものです。現在のところ、最後の難問といわれる「リーマン予想」が、素数に関する思考の歴史の頂点を形成しています。『素数の音楽』では、「リーマン予想」の

問題成立過程と、その解決に挑戦する数学者たちの取り組みを、オックスフォードの俊英数学者が活写しています。素数に関する問題は整数論の中に含まれるわけですが、『整数』は教科書の補助教材スタイルで書かれた小冊子で、同じく小冊子でゼータ関数の発展を中心に書かれた『オイラー、リーマン、ラマヌジャン』などと併読すれば、『素数の音楽』の内容を、わからないなりに自分であれこれ考えてみる楽しみに役立つと思います。また『素数の音楽』には、微積分を知らずにフェラーの『確率論とその応用』（紀伊國屋書店に邦訳あり）を読もうとして歯が立たず、本格的に夜学で勉強し直して、現在数学者として活躍している元・手品師の話など、魅力的な人物が多数登場します。

【書名】	ドレの「神曲」	花さき山	銀河鉄道の夜 （画本 宮沢賢治）
【著者】	ダンテ・アリギエーリ 著 ギュスターヴ・ドレ 画 （谷口江里也 訳）	斎藤隆介 作 滝平二郎 絵	宮沢賢治 著 小林敏也 画
【発行】	宝島社	岩崎書店	パロル舎

＜「ここではないどこか」について＞

思いを寄せた女性に相手にされず、勢力争いに敗れ故郷を追われた自意識過剰な貧乏貴族が、伝説上の人物、歴史上の人物に紛れ込ませて、政敵などの同時代人を裁く「自己中心的正義」の書、『神曲』。

しかし、その怨念の力は、聖書やギリシャ神話のエピソードを巧みに配した虚構の世界（地獄、煉獄、天国）を構築し、ボッカチオ、ボッティチェリ、ブレイク、ボルヘスなど、錚々たる芸術家たちの創作意欲を刺激し続けている。

なかでも、フランスの天才版画家ギュスターヴ・ドレの133枚からなる挿画は圧巻。尾っぽを巻き付け罪の重さを測る審判者ミノス、善人面の怪獣ゲリュオン、堕天使のなれの果て、最下層地獄の主ルシフェル、美貌の蜘蛛女アラクーネなどが居並ぶ地獄篇と煉獄篇は、怪獣カタログとしても必見。

大学院生時代に購入したドレの版画完全収録谷口訳（JICC社版）は、意訳・抄訳部分が多く、はじめて読む人には理解しやすい。100編の詩からなる本文の完全訳を読むには、河出文庫版の平川祐弘訳３分冊が便利かもしれない。収録の詳細な訳注からは、森鷗外、正宗白鳥、夏目漱石、西田幾多郎らによる日本での『神曲』受容状況を窺い知ることができる。また、小型版ながら、ドレの版画も90枚近く収録されている。ついでに、９編のエッセイか

らなる『ボルヘスの「神曲」講義』（国書刊行会、含ブレイクのカラー挿画８枚）をあわせて読めば、素人でも『神曲』を満喫できる。

虚構の世界を楽しむのは、人間の本質。特に子供は、その種の能力に恵まれている。虚構の力を借りて人の道を暗示する日本の名作絵本『花さき山』を『神曲』に対抗させるとすれば、人の醜さが描かれていない分だけ、迫力の点で見劣りするか？

ところで、日本のカレーと同様、キリスト教もまた日本に特有な仕方で定着しつつあるとしても不思議ではない。ダンテが生きながら三獄（国）を旅したように、緑色の切符で乗車したジョバンニ１人だけが生還してしまう『銀河鉄道の夜』。全編には、我が身を赤々と燃やす蠍に象徴された賢治流キリスト教が横溢している。パロル舎の「画本 宮沢賢治」シリーズは、賢治に心酔しているイラストレーター小林敏也の手になる本文完全収録の賢治ワールド視覚化版。すでに15冊ほど出版されているこの画本シリーズのなかでは、他に『土神と狐』、『やまなし』、『オッベルと象』などが印象的。